

Re:終わりから始める異世界生活

イタチ丸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ギヤングのボス、ディアボロは死んだ。

いや、永遠の死を迎えていると言った方が正しい。今もなお世界のどこかで死に続けているのだろう。

何の罪もない人間を平然と不幸にする極悪非道な罪を犯した彼にも、ひとつ希望が存在していることを君たちは知っているだろうか？

もし時間があるのならば、彼のもう一つの未来というものを覗いてはいかがかな？

e
p
i
s
o
d
e
2

7

e
p
i
s
o
d
e
1

1

目
次

e p i s o d e 1

これで死を味わうのは何回目だろうか。

俺は何十回、何百回、何千回とつまらぬ死を繰り返されている。

ある時は病院で腹を切開され、

ある時は車に轢かれる。

そしてまたある時は見知らぬガキに殺され…たのだろうか。

俺のそばに近寄るな、そう叫んでからもはや何もかもがおかしくなってきた。

だが、鎮魂歌^{レクイエム}は終わることをやめない。

「終わりのないのが終わり」これがG^{ゴールドエクスペリエンス・レクイエム} E R の能力なのだから。

…このまま俺の精神を崩壊してしまいたい。

一瞬の安らぎを与えてくれない死への恐怖、俺の別人格の死という苦しみから逃れて、俺が俺でなくなってしまうほど楽になれることだろう。

だが、レクイエムはそんなことは許してはくれない。

逃れようとも受け入れようとも、どの道俺は死に続ける。精神崩壊ですら許してくれないのだ。

――

そうこうしている内に、目を覚ますとまた新たな景色が広がっていた。

いつも仰向けの状態から始まる俺だが、今回は街のど真ん中に突っ立っている。

その街というのもイタリアとは雰囲気が違う。いや、まず馬車のよな乗り物を巨大化したトカゲが引いている点。

そして、『獣人』という奴なのだろうか。周りには犬や猫のような顔をしたのが人間のようになっているのが大半な点など、もはやイタリアアどころか地球上の物ではないんじゃないかと疑ってしまう。

もしや…俺はこの道端の痰カスを食べる雑種のような顔をしたゴミどもに喰い殺されるのか!?

あのデカイトカゲに轢かれて脳を踏み潰されることも考えられるが…。

どちらか死を選べられるとしたら、後者の方がマシだ。こんな化け物揃いに俺の肉をご馳走したくもない!

「ちよつとどけどけどけ! その奴、ホントに邪魔!」
「なっ…!?!」

切羽詰まった声を上げて、誰かが俺を押し退けていく。

そのままバランスを崩し、倒れていく体で視線だけ持ち上げる。

その視界を少女が横切っていく。

「あ、ゴメンな!手を貸してやりたいけどアタシ忙しいんだ!それじゃあな!」

目が合った少女は俺に申し訳なさそうに手を上げ、走る勢いを殺さないまま細い路地へと駆け抜けていった。

その姿を目で追うが、その直後俺の視界には人を運ぶトカゲがこちらに迫ってくるのが見えた。

クソツ!よく分からない変な場所に飛ばされたと思ったら、結局レクイエムで死ぬ運命になるんじゃないか!このディアボロに、運は味方してくれないのか!?

だが、こんな場所でもがき苦しむくらいなら死んだ方がマシだ!俺は等々考えるのをやめ、このまま目を閉じ死ぬ覚悟を決める。

……………ドスンッ!

「…何も起こらないぞ!」

死が訪れると思っていたのだが、俺の身には痛みも何も起こっていない。

俺は再び目を開ける。すると、俺を踏み潰すはずのトカゲが既の所で止まっていた。

「…お、おい。あんた、何かにぶつかってたっぽいが大丈夫か?」

「…は？」

馬車から降りた男が、俺に手を差し伸べてくる。

どういうことだ…!?俺は喰い殺されるか踏み潰されるかを悟ったはずなのに…!予想が外れたのか…?

だが、今までそんなことはなかった。俺の予想は賭け事で億万長者になれるんじゃないかという位の的が当たっていた。

…もしま、この場所にいれば俺は生きられるのではないか？

確かにこんなクソみたいな所で生き地獄といのは勘弁だが、生きられる手掛かりが掴めるのならそれでも構わない。

俺は手を差し伸べた人間を初め次々と人を押し退け、好奇の視線を浴びていた表通りから裏路地へと場所を移すことにした。

――

とりあえず今の現状を整理しよう。

まずこの街…いや、この世界自体が俺がいた世界と異なっていると仮定する。

馬車を引いているのがトカゲであったり、通行人の大半が獣人であったりと、まるでお伽話のような異世界に飛ばされたのだろう。

次に、この国の文明はイタリアと同じ中世風つところか。地面の舗装、建物の構造はローマと然程変わらない。当然だが、俺が所持している物は何もない。

そして、俺が最も疑問に思っていた「死が訪れていない」こと。

普通、目を覚ましてから死ぬまでの時間はおよそ3分なのだが、今回は5分いやそれ以上かかっている。

何故なのかは分からんが、一つ考えられるとするならば

『GERの能力がこの異世界で発動するのには時間がかかるのではないだろうか』

例えるならば、電波を受信する電子機器の動作が何か他の物によって妨げられる電波障害と同じ原理だろう。

GERの能力もこのディアボロに向けて発動するという動作がこの世界の何らかの現象によって妨害されていると考えられる。

果たしてその考えが当たっているかどうかは定かではないが……だが必ずしも死が訪れないという訳ではないのは確かだ。とにかくこの場をどうにかせねば、俺は立ち上がって再度大通りへと足を向ける。と、

「うおっ…!?!」

路地から出ようとしたところで、俺はちょうど通りかかる人影にぶつかりかける。

「貴様、わざとこのディアボロにぶつかろうと…っ!?!」

後ろから肩を思い切り掴まれて、体が道を引きずり戻された。

たたらを踏みながら振り返ると、大柄な男とその2人の仲間が路地を塞ぐように立ちはだかっていた。

「貴様ら…何のつもりだ」

「立場分かってねえのか? まあ、出すもん出しゃあ痛え思いはしねえよ」

侮蔑と嘲笑混じりの視線。男たちの年代は二十代そこらで、カツアゲすることしか脳がないただのチンピラだろう。

「ガキどもが、あまり調子に乗らない方が良いぞ。GERの能力が発動しない今、このディアボロは帝王に戻りつつあるのだ!」

「なに言ってるのか分かんねえけど、俺らを馬鹿にしてんのは分かった。ぶち殺してやる」

こいつらは何も凶器を持ってはいないようだ。ならば、肉弾戦は俺の方が優勢だ。

「後悔させてやる、このディアボロを馬鹿にしたことを！」

言い切つて、先頭の大柄な男の顔面に拳を叩きつける。

拳は鼻面を見事に直撃。殴られた側は地面に倒れこむ。

残りの2人は揃つて俺に襲いかかってきた。

左から襲いかかつてくる首輪をつけた男には後頭部に肘を一発、小柄な男には壁に叩きつけて悶絶させる。

スタンドが無かろうと力は健在。こんな小物など片手でも十分だ。

「ふん、やはりその程度だったかー！ー。」

最後に男どもにとどめを刺そうとする。

が、奴らの手の中に見つけたのは、きらりと光るナイフ。

「なっ!? 何イイイイイイ!?」

スタンドを使えない今の俺にとって刃物は死ぬ運命の鍵と同じだ。

何故だ、このガキどもの脳に衝撃を与えるほどのダメージを与えたというのに…!まさか、GERの能力が今になって行き届いたということなのか!?

「この野郎、よくもやりやがったなクソが！」

少しずつ後ずさりする俺の身体を蹴り飛ばし、更に腹を踏みつける。

先に手を出したのはこのディアボロなため、この男たちには容赦がない。

「動けないようにしてから身ぐるみ剥いでやるよ。ふざけた真似しやがって…!」

「こ、こんなところで…。お、俺はディアボロだぞ…!こんな便器に吐き出された痰カスどもに…!」

いまだ体は踏みつけられたままで動けない。

男の手にしたナイフの煌めきに、間近に迫る「死」の実感が湧き上がる。

結局、時間がかかっただけで死ぬことには変わりはないのか…?

諦めの気持ちたちが胸中を支配し、涙がこぼれそうになるのが分かった。

恐怖ではない、そんなものは十分に味わった。ただ、やはり苦しみ

は耐え難い。

全てに見放されるような、圧倒的な絶望感の中――

「――そこまでよ、悪党」

その声は雑踏の喧騒も、男たちの野卑な罵声も何もかもをねじ伏せて世界を震わせた。

e p i s o d e 2

時が止まる、というのはこういうことだろうか。

路地の入り口に、1人の少女が立っている。

編み込みの入った、腰まで届く銀髪。理知的な紫紺の瞳でこちらを見据えている。

「て、てめえは一体……」

「今なら許してあげる。私の不注意もあつたもの。だから、潔く盗つたものを返して」

「……は？盗つたもの?？」

「お願い、あれは大切な物なの。あれ以外なら諦めもつくけど、あれだけは絶対にダメ。お願い、いい子だから大人しく渡して」

懇願の気配すら漂わせている少女……。

だが、現場には不可解な圧迫感が高まりつつあつた。言葉にし難い何かが起きている。

「え、ちよ、ちよつと待て。こいつを助けに来た訳じゃねえの?」

「……変な格好の人ね。三対一なんて感心しないけど……私と関係あるのか聞かれたら、無関係よ」

話をはぐらかされているかと思つたのか、少女の口調にかすかな苛立ちが感じられた。

先程の慌てようだと多分こいつらではないだろう。だとしたら……心当たりはある。男達の代わりに、俺は弁明を始める。

「…冷静に考えてみる。こんなカスどもに強奪が出来ると思うか?恐らく、この先に逃げたガキが貴様の目標としている人間だろう。あの足であればかなり距離はあると思うがな」

「……その言葉は嘘じゃないみたいね。それじゃ、盗つた子は路地の向こう?急がないと」

俺の言葉を信じた後、少女の脚が外へ向かう。

男達が露骨に安堵している内に、踏みつけている男の足を折ろうと……

「…つーか、今俺達のことをカスって言ったな!?もう限界だ、すぐに楽

にして「でも、それはそれとして見過ごせる状況じゃないの」

振り返りざまに掌をこちらへ向けた少女。その掌から輝きが乱舞して放たれていた。

硬球が肉を打つのに似た鈍い音が響き、男たちが悲鳴を上げて吹っ飛ばされる。

こいつ、スタンド使いか!? ホワイトアルバムに若干似ているようだが……。

いや待て。何故スタンドを持ってない俺に能力が見えている? スタンドを持たない人間には見えるはずがないのに:!!?

「やって……くれやがったな」

氷塊の一撃を受けた男たちが立ち上がる。

足をふらつかせて立てたのは2人だけで、打ち所の悪かった1人は昏倒中。ただ、仲間がやられたことがかえって男たちの逆鱗に触れたらしい。ナイフをもった男とは別の奴が鈍器を手に、臨戦態勢に入っている。

「こうなりや、相手が誰だろうが知ったことかよ。収まりがつかねえ、困んでぶっ殺してやる! 二対一で勝てると思ってるのか!？」

「そうね、二対一は厳しいかも」

「……じゃ、二対二なら対等な条件かな?」

少女の声を引き継ぐように、中性的な高い声が新たに路地の空気に割り込んでくる。

…近くにまだ誰かがいるのか? 辺りを見回しても姿が見当たらないのだが。

そんな困惑する俺たちに見せつけるように、少女が手を伸ばす。

「あんまり期待されると、照れちゃうよ」

その手に乗っかっていたのは、猫のような小動物。

もし俺がキング・クリムゾンを所持していたならば、奴をスタンドと断定するのだが、どうやら違うようだ。

「せ、精霊術師…!？」

「ご名答。今すぐ引き下がるなら追わないわ。すぐ決断して、急いでいるの」

少女の言い分に男達は倒れた仲間を担ぎ、路地の外へと向かう。

「面覚えたからな、今度会ったらただじゃおかねえ」

チンピラの精一杯の恫喝なのだろうが……やはり小物極まりないな。

カスどもの姿が見えなくなり、路地に残されたのは俺と少女のみ。

というか：俺は助かったようだな。異様なことが次々に起こり過ぎて、つい我を忘れていた。

とにかく、こいつは俺を助けてくれた恩人だ。悪党の俺が頭を下げるというのはあれだが、礼の一つは告げねば……

「……動かないで」

「なっ…!?!」

そんなことを考えていたのに対し、少女は情を感じさせない冷たい声で睨みながら俺に言った。

彼女の瞳には警戒の色が濃い。俺が男たちと別口だとは理解していても、その存在が善性であるとは欠片も思っていない。自分の言ったことに従わなければ殺すと言わんばかりの、そんな目だ。

屈辱だが、俺は少女の言葉に従うしかなかった。

もし動いたら、きつとさつききの氷塊を雨のように降らせて俺を殺しにくるだろう。

というか、俺はいつまでこの死が訪れるかもしれないという苦しみを味わなければならぬんだ。いい加減勘弁してくれ…。

「……え、ちよつと何でそんな怯えてるの？私そんな怖い顔してた…？」

「きつと彼に何か特別なことがあったんだろうね。ちなみに、もう急いだ方がいいと思うよ。逃げ足がすごい速かったから、きつと風の加護があるよ、犯人」

「なんでそんなに他人事なの、パツクは」

「手出し口出し無用って言ったのそっちなのに」

若干の緊迫した空気から嘘のように和らげていつていることに、俺は横で困惑していた。

こいつらは一体何がしたいんだ……。とにかく、さつきと俺の視界か

ら消えてもらわねば。そう思つて、会話の場から横を入れる。

「…急いでいるんだらう？俺のことは放つて、早くこの場から消え去れ……」

ハア、ハア…と息を荒げながら声を発する。

もはや声を出すよりも、精神の疲労の方に意識が集中してしまうのと同時に、その意識が途絶えるような睡魔に襲われる。

死ぬ苦しみを味わうよりかはマシだが、その間に何かに殺されるかもしれないという恐怖ももちろんあり、中々意識に従えない。

「—で、どうするの？」

「関係ないでしょ。死ぬほどじゃないもの、放つておくわよ」

遠ざかり始める意識の彼方で、そんな二人（ひとりと一匹）の会話がわずかに聞こえる。

よし、それで良い…。それにしてもあの小娘、人情味に関してもシビアな見解を持ってやがる。

このまま路地裏に捨て置かれるのか、というネガティブな思考と。呼吸のように死に続けていた俺を救ってくれたことだけでも御の字だなどという安息な思考。

そんな消極的な両結論を得ながら、俺の意識は段々、段々と遠くへ――。

「…と言いたいところだけど、聞かなきゃいけないことがあるから」
「…は？」

その直前、急に少女の思考が180度変わったかのように再度近づいてきたことに、俺は意識をスツと取り戻す。

せつかく少し楽になれると思つたのに、今度は何をやる気なんだこいつは…。

そう警戒していたのも束の間、少女は掌をこちらに向けて何かを唱える。

同時に、何故かは分からないが、俺の心と身体が軽くなったような気分へと回復した。

「…貴様、何のつもりだ」

「勘違いしないで。聞きたいことがあるから仕方なく残つたの。それ

がなかったらあなたのことなんて置き去りにしたわ。そう、してたの。だから勘違いしないこと」

妙に自分の事を押し付けてくるので、流石にそれ以上は突っ込めないでいた。少女は続けて言う。

「こうやってあなたの精神と体に治癒魔法をかけたのも、自分の都合のため。だから、その分に応えてもらうわ」

「…恩着せがましい無礼な態度を取っているのは些か納得がいかんが、まあいい」

『情けは人のためならず』を地でいくような論法だが、俺に治療を施した奴に反抗は出来まい。

少女は厳しい顔つきのままでどことなく声をひそめて問いかける。

「——それで、あなたは私の盗まれた徽章に心当たりがあるわね？」
「心当たり…？…ここがどこかすら分からないこの俺に、そんなものあるはずないだろう」

徽章、というといわゆる弁護士や検事、自衛官などが身分を証明するためにつけるバッジに当たるものだろう。

この街に来てまだ間もない俺に、それを見たと言う記憶は皆無である。

よって、彼女の求めているだろう期待に応えることはできない。

しかし、少女はそんな俺の答えに対して落胆した様子もなく頷き、「そう。それじゃ仕方ないわ。でも、あなたには何も知らないという情報をもらうことができたわけだから、ちゃんとケガを治した対価は貰っているわね」

と、詐欺師もびつくりな論法で自分の丸損を表明したのだった。

知らない、そんな一言で治療の対価を貰ったとほざいているのだから、当然俺もあつけにとられていた。

それに対して少女は吹っ切るように大きく手を叩き、

「じゃあ、もう行くわね。悪いけど急いでの。ケガは一通り治つてはるはずだし、脅したから連中ももう関わってこないと思うけど、こんな時間に人気のない路地裏にひとりで入るなんて自殺志願者と一緒だから。あ、これは心配じゃなくて忠告よ。次に同じような現場に出

くわしても、私があなただけを助けるメリットがないから助けなんて期待されても困るから」

俺に発言する権利を与えないほどの早口で言いまくってたて、押し黙る俺の沈黙を肯定と受け止めたのか、少女は「よし」と満足そうに呟いて身をひるがえす。

「ゴメンね。素直じゃないんだよ、うちの子。変に思わないであげて」
笑いを含んだ口調でフォローして、スタンドに似た猫は少女の肩にやわらかに着地する。少女の手がその感触を確かめるように猫の背を一度撫で、その姿は銀髪の中にもぐるように消えた。

まあ、奴が納得しているのなら、それで良いのだからー
…いや、待て。

もしあの小娘がこのまま立ち去ったとして、俺はどうすれば良い。
GERも未だにやってこない今、俺はこの街で、この世界でどうやって生活していけばいいのだ。

もうこんな腐った路地裏でホームレスのように絶望しながら生きていく訳にも行かない。

…確か、あいつの求めているものは盗まれた徽章だったな。

盗まれたということは、元々は小娘が所持していた物。つまり、弁護士やら何やらの上級職に就いている、あるいは貴族なのだろう。

仮にそうだとすると、奴の跡をつけば何か良い情報を手にすることが出来そうだし…。

「——おい、待て女」

路地の入口、大通りへ繋がる場所で首をめぐらす少女、その背中に声をかける。

長い銀髪を手で撫でて、わずらわしげに彼女は振り返り、

「なに？　話ならもう終わったわ。もう私とあなたは無関係の他人です。ほんの一瞬だけ人生が交わっただけの、赤の他人。それと、私は女なんて名前じゃ」

「黙れ」

「…っ!？」

先程怯えていた奴とは一変して、冷めた口調で問いかけられた少女

は俺の一言でほんの一瞬だが体を震わせていたように見えた。

二重人格なんじゃないか、と思われているかもしれないが、これがこのディアボロの本心だ。今はこいつのおかげで気分が穏やかだ。

「俺を回復してくれたことの恩返しに、お前の手を貸すことにした」
「でも、あなたは何も……」

「何をしようがしてまいが、とにかく俺に恩返しをさせろ、と言ったんだ。俺をこんな公衆便所のような腐った場所で孤独死させるつもりか？」

先程とは立場が逆転して、俺は威圧するように少女に念を押す。

お前がやったように、俺も沈黙を続けるのならば肯定と見なすが……。

「——変な人。意味分かんない」

口元に手を当てて、珍獣でも見るかのように小首を傾げる。

真つ向から俺の同行を否定するか、こいつ……！

「言っておくけど、なんのお礼も出来ないし、そもそも恩返しされるようなことしてない。ケガのことなら、ちゃんと代価は貰ってるから」
あくまで頑なな姿勢を崩さない少女。

そんな彼女の頑固な態度に、「それなら」と前置きを入れる。

「それなら、これも俺の都合のためだ。『過去の自分に打ち勝つという試練』のために俺はお前に手を貸す。これでどうだ？」

「でも……私は」

「意地を張るのも可愛いと思うけど、意地を張って目標を見失うのは馬鹿馬鹿しいと思うよ。ボクはボクの娘が馬鹿な子だと思いたくないなあ」

言いたいことは言い切ったつもりだ。

そんなやり切った顔の俺に少女は思案顔。しかし、そんな彼女の頬を肩に乗る灰色猫がその肉球でつつき、

「素直に受け入れておいた方がいいと思うよ？ まったくの手がかりなしで探すなんて、王都の広さからしたら無謀としか言いようがないし」

「でも……私は」

「意地を張るのも可愛いと思うけど、意地を張って目標を見失うのは馬鹿馬鹿しいと思うよ。ボクはボクの娘が馬鹿な子だと思いたくないなあ」

肩をすくめて挑発的にたしなめる小猫に少女の眉尻が上がる。

それから彼女はしばらく落ち着きのない様子で悩んだ挙句、

「——本当に、なんのお礼もできないからね」

なんとか交渉を成り立つことが出来た。

少し、いやかなりめんどくさい奴だが、帝王の力を取り戻すまでは利用させてもらおうか…。

「(…勿論、彼女に手を出したらすぐ様殺すけどね)」